

巻頭言

京都女子大学児童学科における15年の“私”の在り方を顧みて

船岡 三郎*

大塚名誉教授に誘われて、昭和62年4月1日京都女子大学に契約教授として赴任した。講義のノルマは週4講時（4コマ）や、委員会委員の役割は何もなく、また自宅からは車で30分以内ということで、私としては極めて暇な勤務状態になった。そこで私は京都女子大学在職の12年間（当時は定年が70歳）に大学の内外において研究活動を活性化して、今までの研究資料をまとめてみたいと思っていた。

ただ前任校の経験から、組織や体制の変革や新しいプロジェクトを打ち出すことは極力避けて、大学行政にうかつに巻き込まれないようにしようと決心していた。それは京都市教育研究所に在職中に、私がカウンセリングに専念できる場として、カウンセリング・センターを設立しようとしたことである。そしてそのために心身ともに膨大なエネルギーを消耗した。今から考えてみれば、その当時新卒、新人で20代の私には、それが如何に大変なことであるのか理解できていなかった。いわゆる“若気の至り”とか“蛇におじず”の類いであった。しかしその努力は功を奏して、京都市教育委員会カウンセリング・センターが設立された。

しかし、行政組織の中で、こうした改革をすることが大変であることを実感し、それが私の生活史における1つのトラウマにもなった。その結果、私は大阪府立社会事業短期大学に移った。この大学は講義のノルマは週3講時で暇な大学であり、その間にカウンセリングの実践や研究をかなり進めることができた。しかしやがて大阪府立大学に統合されることになった。そのため短大から4年制、また大学院の設立とい

うことで、私は大学行政の渦中に巻き込まれ、しばしば文部省へ足を運ばざるを得なかった。この過程の中で、人間福祉センター（仮称）が設備のみ完成したが、それらのスタッフを始め人事等をめぐって、私の心も傷ついたり、また周囲の人々の心も傷つけたと思っている。さらに通勤には2時間30分ほどかかるということで、私の心身は正直なところ疲弊していた。

私は京都女子大学で児童学科の児童教育に所属することになった。私の専攻がカウンセリングであることは周知されていたが、多分大塚教授を始め、児童学科の先生方は児童教育とカウンセリングは類縁関係にあると認めておられたのであろう。また伝統的な教育哲学を基盤にした児童教育学よりも、実践的・実証的な見地からの児童教育学の構築を期待されたのもあろう。学生への講義内容としては、こうした児童教育学の構築を意図して講義を行ってきたが、それをまとめて公判するまでには至っていない。なぜなら伝統的な児童学、児童教育学はペスタロッチを始め長い歴史と研究の積み重ねがある。新しい学問体系を構築することは至難の技である。私の年齢と能力からして、それを実現する自信はなかった。時間・空間を超越した児童の“あるべき姿”を追求する、児童教育学の重大な目的を私は否定しはしないが、多くの子ども達はもちろんのこと成人、老人達までもが極く幼少期からの“あるべき”姿の教育の結果、甚だしい苦悩をもたざるを得なくなっている事実は私の5万時間に及ぶ3000例を越す臨床事例からも、多くのカウンセリングの事例や研究からも明白である。

こうした理論や技法はともかくとして、私の京都女子大学赴任には思わぬ誤算があった。私は研究科大学院では家庭教育学領域に所属して

* 京都女子大学教授（児童教育学）
Prof. Saburo Funaoka

いた。これまで（昭和62年度まで）家庭教育学領域の大学院の志願者は数年に1名程度で、実質的にその存在は無きに等しかった。従来から家庭教育は重視されていたが、それは建前的な認められ方で、この領域を専門的に学問として専攻し研究しようとする人は極めて少なかった。そのため私は、学部学生の教育に専念でき、十分な研究の時間も取れる。そして未処理のまま集積されている膨大な資料をまとめることができると安易に考えていた。しかしそれは大きな誤算であった。

昭和62年の秋の募集には、大学院の家庭教育学領域に6名の受験生があり、3名の入学を許可することとなった。その中には前任校の聴講者の顔も見えた。志願者増の結果、14年間に家庭教育学領域だけで60名近い修了者をだすことになってしまった。

志願者は私がカウンセラーであり、カウンセリングを専攻していることを知って、将来プロのカウンセラーを目指して志願してくる人達ばかりであった。こうした事情から私は、大学院生の教育にも本腰を入れざるを得なくなった。

私の大学院教育のモデルは、ミシガン大学心理学部臨床心理学科の大学院課程の教育であった。私が留学している時、当大学では、スタッフが47名でそのうち精神力動論を専攻しているスタッフが45名であった。つまり、精神分析を核に5年間教育し、その後1年のインターシップを経て、Ph.Dを授与するというものであった。

児童学科のスタッフではとてもミシガンにかなうわけではない。しかし学生が折角プロのカウンセラーを目指して入学した以上、私の当面の目標は、修士課程2年を含めて、5年間程集中的に学習すれば、現在の物価に換算して1時間当たり5000円程度のカウンセリング料をとってもクライアントが集まる臨床能力の開発であった。大学の児童学科の学生は学部生でもかなり

学習意欲があるが、院生の学習意欲はすさまじいものがあった。私の開講科目は1、2回生を問わず全員が出席した。すなわち全員が同じ科目を2回受講するのである。また研修者も多く、極端な場合は私が開講した科目を13回聴講した人もある。また大学院生と共に読んだ、世界最先端の国際的学術誌の論文は、数百編に及んだ。学生の研究に自発性と自主性を尊重したために、研究テーマの選択は自由であった。このため私の充分理解していない領域、たとえばコフート・カンバーク・ストロロウ等の著作も熟読せざるを得なかった。

こうして私は学生から刺激を受けて、極く最近の研究についての世界の動向をかなり学ぶことができた。その結果を一言でいえば、人間の最早期つまり二者関係時代の母子間の心の病理が直接的に子どもの心の病理を生む、つまり家族の病理が子どもの病理に重大な関係があるということであった。

ミシガンをモデルにした指導目標のために、講義の内容も学生に提供した資料も、当初からかなり高度なものであったが、学生の学習意欲は十分にそれを克服した。また学生の要望もあってベテランの研修者は、自主学習会をいくつか開講して、児童学科のスタッフの不十分なところを補完して頂いた。そのご好意に厚く御礼申し上げます。

児童教育学専攻の学部学生の卒業研究指導も、昭和62年度38名で退職する年度は24名で、これらの卒業研究の指導と修士論文の指導のため、京都女子大在職中は正月らしい正月は全くとれなかったが、教師冥利に尽きるとはこのことだと深く感謝している。こうした教育三昧の生活を送らせて頂いたのは、児童学科の先生方は勿論のこと家政学部の先生方、事務局また学園の暖かいご支援とご援助があってこそ可能であった。皆様方に紙面を借りて厚く御礼申し上げます次第である。